

フランス国営ラジオ局（1946-54）による音楽を通じた国際文化交流

田 崎 直 美*

Radiodiffusion Française (1946–54) and the use of music as a cultural strategy: promotion of international exchange activities

TAZAKI Naomi

Abstract

Radiodiffusion Française, the French national radio organization established post WWII, sought to disseminate French culture to other countries through its policies despite the political or economic instability in the country. This paper examines the role of art music in helping *Radiodiffusion Française* achieve this during its early period (1946-54), focusing on the aspects of international exchange between radio programs as well as the repertoire tendencies of the *Orchestre national de la Radiodiffusion Française* (ON) at its international musical tours.

Representation of French contemporary music was found to be the key to overseas cultural advancement. Going by this finding, *Radiodiffusion Française* adapted its manner of selecting music programs and repertoire for the ON to suit the political and cultural backdrop of various countries. It also sought to form agreements with foreign radio stations who owned their own orchestra wherein these radio stations would represent and promote contemporary music in their respective countries. The success of international tours organized by the ON was especially important for justifying the domestic musical policy led by radio music director and composer Henry Barraud, who aimed to defeat the supremacy of nineteenth-century German romanticism and heighten the French cultural identity through French contemporary music.

Key words: France, radio music, cultural policy, *Orchestre national de France*, international cultural exchange

1. はじめに

1944年夏にドイツ軍による占領から解放されたフランスでは、ラジオ放送の重要性から民間の基地局を接收、1945年3月情報省のもとに独占的な「フランス国営ラジオ局 Radiodiffusion Française」（以下、「国営ラジオ局」と略記）を発足させた。1939年からおよそ1960年代半ばまでは「ラジオの政治時代」(ECK 2010: 688)といわれるように、ラジオ局は厳しい国家権力の管理下におかれる。その裏返しとして、この時期ラジオは文化機関の中でも最も重要な地位を占めており、大規模な「制作所」ともみなされていた (LE BAIL 2009: 330-331)。「国営ラジオ局」芸術部門監督のジルソン (GILSON, Paul: 在任1945-63) は、芸術番組制作は「重点的国家プロジェ

キーワード：フランス、ラジオ音楽、文化政策、フランス国立管弦楽団、国際文化交流

*平成25年度リーダーシップ養成教育研究センター 講師(研究機関研究員)

クトの一つである」(MÉADEL 1999: 155) と主張し続ける。音楽番組は全放送番組の約半数を占め続け、「国営ラジオ局」はフランスで最も重要な音楽家の雇用主 (ECK 1997: 645) でもあった。このように「国営ラジオ局」は、第四共和政時代 (1946-1958) のフランスの音楽政策の場とみることができるのである。

本研究は、こうした「国営ラジオ局」での芸術音楽番組・音楽活動に対する政策と実態を明らかにし、その意義と効果を考察する一環である。本研究は特に、「国営ラジオ局」が外国との文化交流活動を積極的に行った点に着目し、その意図と政策のあり方、およびその効果について考察を行うことを目的とする。

第四共和政期「国営ラジオ局」の音楽政策に関する重要な先行研究には、組織及び公共サービスの観点からの詳細な研究 (ECK 1997)、占領下フランスの二大ラジオ局 (ラジオ・パリ Radio-Paris と国営ラジオ局 Radiodiffusion nationale) での音楽活動から解放直後の「国営ラジオ局」における音楽家粛清に関する研究 (LE BAIL 2005)、「国営ラジオ局」音楽監督の残した自伝情報 (BARRAUD 2010)、また「国営ラジオ局」一部部門クラブ・デッセイ Club d'Essai での実験的音楽制作に関する研究 (CLANCIER 2002; PROT 2006) がある。この他、冷戦と音楽の観点からの研究 (ALTEN 2000; SPROUT 2013)、附設機関であるフランス国立放送管弦楽団 l'Orchestre national de France (以下 ON と略記) の戦後の活動に関する研究 (CANTAGREL 1994; PORCILE 2001) も重要である。筆者はこうした成果を踏まえつつ、第四共和政期「国営ラジオ局」の音楽政策について、音楽番組内容とその方針の調査の観点から検証してきた¹。その結果、これまでに次の点が判明している。一つは、解放後の「国営ラジオ局」が視聴者の意向とは関係なくフランス音楽及び現代音楽を多く含む芸術音楽番組を擁護し、それらを通じた国民教育および「国家の威信」の表明を方針として強く打ち出し続けた点である。また「国営ラジオ局」は現代フランス音楽と音楽家に対するメセナも自負していた。一方で、「国営ラジオ局」は芸術音楽番組 (上演作品) にて過度なナショナリズムの表明を排除し、他国の音楽も積極的に紹介するなど国際性に配慮していた。被占領からの解放後も冷戦や植民地戦争への対応がせまられ、政治的にも経済的にも不安定な状態にあったフランスでは、国内の復興と並行して対外不安を取り除く必要があったのではないか。この時期、関係国との友好関係強化のために「国営ラジオ局」はどのような音楽政策や方針を打ち出し実行したのか。本研究はまだ具体的に解明されていないこの問題について、公文書や演奏記録などの史料調査から検証と考察を行う。対象期間は原則として、ラジオ放送新体制 (Office Français de Radiodiffusion) が成立した1946年より、視聴覚放送に変化が訪れた²1954年までとする。

2. 「国営ラジオ局」の国際文化交流の方針 (1946-47年)

「国営ラジオ局」が音楽分野で図った国際交流は、(1)外国との放送番組交換、および(2)外国との人的交流、すなわち、それぞれの国が有するラジオ放送楽団の演奏会での外国人演奏家の招聘やラジオ放送楽団の外国公演、に大別できる。解放後最も早く行われたのが、著名な外国人指揮者の招聘であった³。1946年以降には組織レベルでの交流の取り組みも、矢継ぎ早に計画され実行された。

外国との放送番組交換に関して、「国営ラジオ局」総局長ポルシェ (PORCHÉ, Wladimir: 在任1946-57) は1947年1月に「交流政策 la politique de liaison」として、「フランスの番組で、優れた外国放送を「中継」で紹介すること」(強調は本文) の実施を報告している。目的は、ラジオの聴衆や制作者に外国との競争意識を喚起させることでラジオの国際的放送交換の流通を発達させ、最終的には外国でフランスの番組を広く知らしめることであった。ポルシェは次のように述べている。「フランスのラジオ局は国内の気晴らしや娯楽に甘んじるべきではない。ラジオ放送は、人々に国境を越えさせ、自分たちの文化を地球上の他の地域に住む人々に伝授させるのに最も強力でもっと早い手段なのである。」「アメリカ合衆国や英国のような大国では、ラジオ放送手段の交換の重要性はすでに認められている」⁴。切迫した競争意識のもと、1947年3月25日に「外部 (外国及び海外仏領) 向け番組部門 Direction des Programmes ver l'Extérieur」がラジオ外交を専門的に担当する部門として設立され⁵、外部ラジオ局が関係する諸問題を運営、組織、管理する役目が一本化された。4つの下位部門の一つとして設けられた芸術部門 Le service artistiqueは音楽を含み、番組選択の他、外国のラジオ局関係者との接触・連絡、芸術家や技術者、物資や資料の交換等を一極集中的に管理した。フランスの文化遺産や芸術動向の紹介を主目的としたナショナル・チャンネル chaine nationale制作番組の80%を外国放送に使用する決定からも、「国営ラジオ局」

関係者の自国文化発信への強い意欲がうかがえる。ポルシェが表明した「外国向け放送の拡張への努力」⁶は成果を上げ、1946年から数年間でフランス制作番組の外国放送は急速な拡大を遂げた⁷。

外国との人的交流に関しても、「国営ラジオ局」は早い段階から検討をしていた。ポルシェが総局長に就任した直後で1946年9月5日に「国営ラジオ局」の運営組織 Office Français de Radiodiffusionが発足する前、おそらくフランス・ラジオ中央顧問 le Conseil Central de la Radiodiffusion Françaiseでの審議にて、「外国ラジオ局との関係は、単純な番組交換を超えて活動を拡張せねばならない。協力者の交流 les échanges de collaborateurs も等しく含まれるのだ」⁸と主張された。この主張に基づき、ONと外国放送楽団との間での指揮者の交換招聘や交換演奏会の具体的な計画が言及されている。

1947年以降、「国営ラジオ局」は国際交流監督 Le Directeur des Echanges InternationauxのJ.Manachemのもと、多くの国と放送協定を締結している。協定内容の多くはそれぞれの国の言語による番組放送に関するものであった。音楽番組放送に関する場合、(1)「国営ラジオ局」と相手国が、それぞれの放送管弦楽団による交響演奏会番組（生放送、録音放送どちらも可）を相互に提供・選択して放送する取り決め、(2)それぞれの国の現代音楽番組の放送、および(3)「国営ラジオ局」と相手国ラジオ局がそれぞれ相手側の放送管弦楽団の指揮者を首都に招聘し、相手国の音楽に特化した公開演奏会を開催、自分側の放送管弦楽団にて指揮をしてもらう⁹、という内容が見受けられた。

3. 「国営ラジオ局」と外国ラジオ局との番組交換状況について（1946-48年）

それでは、初期「国営ラジオ局」が打ち出した音楽分野での国際交流の方針と方法は、どのような形で実現したのか。まず筆者が「国営ラジオ局」と外国ごとの音楽番組の交換状況について公文書をもとに調査した結果、相手国により交流の傾向が異なることが認められた。

同じフランス語圏かつ隣国であるスイス、ベルギーでは、解放直後より単発的な芸術音楽放送交換が行われている。これは音楽監督や特派員を通じたラジオ局間の積極的な相互連絡に因る。最も早い時期から対等な番組交換が行われていたのはスイスとである。1945年11月に、ラジオによる芸術的・技術的交流に特化した企画「フランス・スイス ラジオ週間 Les Semaines radiophoniques Franco-Suisse」が行われた。ここでは、スイス（ラジオ・ジュネーヴおよびラジオ・ローザンヌ）にてフランス人技術者により、スイス人演奏家の上演するフランス人作曲家（ドリーブ、ミヨー、アリュール）の作品がスイス国内に放送される。フランスでも同様に、「国営ラジオ局」にてスイス人技術者により、フランス人演奏家の上演するスイス人作曲家の作品がフランス国内に放送された。こうした企画は「偉大な他の国々のラジオ局との交流のプロトタイプとなり得るであろう。」とされた¹⁰。ベルギーは1945年11月1日にベルリオーズ作曲《死者の大ミサ》をブリュッセルから中継放送し、1946年4月26日以降ブリュッセルからの演奏会中継を定期的に（当初は毎月一回）行っている¹¹。

英語圏でも、連合国であった英国およびアメリカ合衆国とのラジオ局間で早い段階から交流があった。フランス側からの英国向け中継放送は、「文化プロパガンダとしてのフランス音楽プログラム」、もしくは英国における「愛国的または芸術的な記念行事」用に「フランス人により特別に演奏されたアングロ＝サクソン系音楽プログラム」が考えられていた¹²。一方BBCから「国営ラジオ局」へ供給される音楽番組はジャズ音楽が中心であった。1946年3月から毎週ナショナル・チャンネル（Chaîne A）は「ジャズの王たち」を中継放送し、同年10月からは、ジャズ、キャバレー音楽、ミュゼットなどの「ホーム・サービス（“Music while you work” 等）」「軽番組」を毎週中継・録音放送している。1948年1月からは「ヴィクトリア朝の歌曲 Mélodies Victoriennes」も毎週中継されるのに対して、フランスからはまだ定期的に中継する音楽番組はなかった¹³。ただし戦勝記念などの行事に際しては、BBCは積極的に両国の音楽を中継放送している。1945年6月18日には、BBC放送管弦楽団、スイス国営放送管弦楽団、及びONによる「戦争、勝利、平和の音楽」演奏会にて録音を行っている。また同年11月1日には「強制収容者追悼のための」演奏会とルポルタージュをパリから中継放送した¹⁴。アメリカ合衆国との場合、1946年前後は音楽番組の生放送が技術的に困難だったが、「国営ラジオ局」は解放後週2、3回の割合で、「軍隊ジャズ・オーケストラ」「軍楽隊」「アメリカとシャンソン」「アメリカ音楽演奏会」などのアメリカ音楽番組を放送した¹⁵。1948年1月時点ではまだ「国営ラジオ局」からアメリカへ提供する音楽番組はない。芸術音楽に関

しては、BBCとラジオ・アメリカンから「国営ラジオ局」への録音資料の提供が注目できる。「国営ラジオ局」は外国より、占領による荒廃で極度に不足していた録音資料の提供を受ける立場だった¹⁶。

4. 「国営ラジオ局」と人的交流：フランス国立放送管弦楽団外国公演の意義と効果（1946-54年）

次に音楽分野の人的国際交流について、特に本研究ではONの外国公演に注目し、ONが外国で演奏した曲の作曲家の特徴、およびそのうち「国営ラジオ局」が国内向けに放送した番組¹⁷（【表】参照）を中心に検証と考察を行う。

解放後のONには、演奏の質を高め「国際的競争」(BARRAUD 2010: 405)を意識する方針が音楽部門監督バロー (BARRAUD, Henry: 在任1945-51)より課せられる。ONは1946年から国内外の音楽祭への参加や海外公演を実行した¹⁸。日々の音楽生活の楽団であると同時に「フランス音楽大使」としての役目を背負うという組織は、当時のフランスにおいて極めて珍しかった (ECK 1997: 661)。ナショナル・チャンネル放送のON演奏曲目は、1947年頃にはフランス人現代作曲家の作品が多い (田崎 2013: 342-343)。では国外演奏旅行ではどうであったのか。

ベルギーとの交換演奏会、スイス7都市巡演

ラジオ番組の中で演奏曲目が確認された最も早いON海外公演は、1946年1月31日放送のリモージュ (ベルギー)での演奏会である¹⁹。その約半年後 (1946年5月12日、15日、29日放送)には、ベルギーとの「交換演奏会」、すなわち両国のラジオ放送楽団が相手国に出張公演する試み、が実現している。この交換演奏会で注目すべきことは、海外公演でのフランス現代作品の上演が初めて国内放送されたことである (【表】2)。リモージュ演奏会 (1946年1月31日放送)では、ONは18、19世紀のカノン作品を中心に演奏している上、フランス人作曲家はサン＝サーンスだけであった。しかしブリュッセル演奏会 (1946年5月15日放送)では、ベルギー人現代作曲家アプシル (ABSIL, Jean: 1893-1974)の作品と、フランス人現代作曲家リヴィエ (RIVIER, Jean: 1896-1987)の作品を上演している。ベルギー国立放送楽団のバリ演奏会 (1946年5月29日放送)でも、ベルギー人現代作曲家シュヴルイユ (CHEVREUILLE, Raymond: 1901-1976)の《思い出の交響曲 Symphonie des Souvenirs》の初演と並行してフランス人現代作曲家ミヨー (MILHAUD, Darius: 1892-1974)の交響曲第1番を初演している。批評家クロード・ロスタンはこの交換演奏会に際して、ONが「現代を生きるフランス芸術」の大使たることを希望していた²⁰。

1947年春にONは、スイス7都市 (ビール、ベルン、チューリッヒ、ルツェルン、ラ・ショー＝ド＝フォン、モントルー、ジュネーヴ)に演奏旅行する。8月7日ナショナル・チャンネルでの録音放送によると、ジュネーヴでの演奏曲目はすべて定番のフランス音楽であった点が注目される (【表】5)。これはラジオ番組で現在確認できる海外公演演目の中で初めてのことである。

ロンドン国際音楽祭、アメリカ公演ツアー

スイス演奏旅行の後ONは1947年6、7月に、ロンドン国際音楽祭へ参加した。ONはこのとき日程により演奏曲目コンセプトを区分している。19世紀フランス音楽とドイツ音楽 (6月30日ロンドンから中継放送) (【表】3)、パーセルの作品と定番クラシック音楽 (7月3日ロンドンから中継放送) (【表】4)、イギリス人現代作曲家ウォルトン (WALTON, William: 1902-1983)と現代フランス人作曲家リヴィエの作品 (8月14日録音中継) (【表】6)。ここにきて英国でも、ONは演目の一部ながら相手国の現代作曲家の紹介と同時にフランス人現代作曲家の紹介をすることができた。ラジオ総局長ポルシェは1947年10月の記者会見で、こうした演奏旅行の成功に言及し、「われらのONは世界でも第一級に位置する」と述べている²¹。

ONは1948年10月13日から12月22日まで、北アメリカの35都市にて45公演に及ぶ演奏旅行を行う²²。ONは戦後アメリカ大陸に渡った最初の欧州楽団であった。ONにとってこのアメリカ公演は「その歴史において欠くことのできない節目」となり、これを境に「ONによるフランス音楽の特権的大使の役割が突如として世間に知られるようになった」(DOUAY 1994: 69-70)とされる。北アメリカ公演の重要性は、その公演期間の長さや公演

都市の多さ、移動した地理的広範さに留まらない。「国营ラジオ局」芸術部門監督ジルソンの主導で実現したこの計画には、マーシャル・プランに伴うアメリカ側の経済的負担に対してフランスの保護すべき「文化的価値」をアメリカに顕示するという政治的思惑があったともみなされている (*ibid.*: 67)。この時期「アメリカではフランス音楽に対して曖昧な理解しかされていない。また、ほとんどのフランス人音楽家は合衆国を全く知らない」²³とされていた。こうした状況下でONは、ベルリオーズ、ラヴェル、ドビュッシー、ルーセル、デュカスの作品、すなわち「フランス音楽の遺産」を中心に3つのプログラムを構成して、都市によりプログラムを選択して上演していた。現代作曲家の作品は、オネゲル《典礼交響曲》と、アメリカ人現代作曲家ピストン (PISTON, Walter: 1894-1976) がONを指揮したミュンシュのために作曲した《トッカータ Toccata》の初演 (BARRAUD 2010: 505) を用意するのみであった。

西ドイツの場合

ON北アメリカ公演後、国際交流の上で注目されるのが、1951年以降のONドイツ公演である。なぜなら終戦後のフランスにとって、かつての占領国ドイツとの政治的関係は最も複雑なものであったと考えられるからである。ちなみに、1948年1月時点では、フランスとドイツのラジオ局との間で音楽番組の交換は確認されない。

1945-49年、敗戦国ドイツはフランスを含む4カ国に分割統治される。フランスの場合、ドイツとは近い過去に3度にわたる戦争 (1870, 1914, 1939年) を経験した事情から、「ドイツ社会に対して、潜在的な攻撃性と領土拡張主義を捨てるよう働きかけること」(VINCENT 2008: 13) が最重要課題であった。戦後ドイツ国民を再教育することは国家の文化的使命の一環と考え (*ibid.*: 38)、フランスによるドイツ占領統治では、ドイツ人の「精神全般を修正しながら、また他の文化的枠組みを提案しながら」ナチズムをより巧妙に取り除くことに心を砕いた (JULIEN 1999: 56)。実際、政治的独仏協力体制の基礎となるエリゼ条約 (1963年) 以前に、両者の協力関係は「社会的・文化的交流から」始まったとされる (FRANKE 2011: 1)。例えば、フランスでは1948年ソルボンヌにて、著名なゲルマン諸語研究者、哲学者、ジャーナリストのグループによる「新生ドイツとのフランス交流委員会 le comité français d'échanges avec l'Allemagne nouvelle」が設立された。ドイツでも1949年にルートヴィヒスブルクで、独仏学院 l'institut allemand-françaisが設立される (*ibid.*: 3)。美術の分野では、フランスは自国文化プロパガンダと並行して、ドイツとの美術を通じた文化交流を促進した²⁴。

「フランスとドイツ民主共和国 (西ドイツ) との間に深い価値観の違いがあったにもかかわらず、両者が文化的・社会的に真剣な歩み寄りを行った」(FRANKE 2011: 2) まさに1950年代初頭に境に、「国营ラジオ局」とドイツのラジオ局との音楽文化交流にも変化が生じていることが判る。1948年6月24日放送のONのバーデン=バーデン (この時は仏占領下) 演奏旅行の際、ONは1945年にパリで6カ月にわたり大々的に行った「ストラヴィンスキー音楽祭」のコンセプトをこの地で行っている (【表】7)。「ストラヴィンスキー音楽祭」はドイツ当局がかつて占領下フランスで行った音楽政策に対する反動という政治的意図を帯びていた²⁵。それに対し、1951年9月21日放送のONベルリン演奏旅行ではそうしたプロパガンダはなくなり、フランス音楽とドイツ・オーストリア音楽を半分ずつ採り入れてプログラム構成をしている (【表】8)。全4曲中3曲は定番作品であったが、1曲はフランス現代作曲家リヴィエの《交響曲第5番》(1950作曲) であった。

1952年に入ると、ONは「ドイツのラジオ局 la Radio allemandeの招きにより」²⁶ドイツ4都市で巡回演奏を行った。この4都市演奏旅行では、2つの異なるコンセプトのプログラムが準備された点が特徴である。バーデン=バーデン (4月16日) およびフランクフルト (4月17日) のスタジオ公開演奏会は、フランス現代音楽で構成されていた。演奏されたフランス現代作曲家の多くは、フランス国内で占領下レジスタンス運動に携わったと認識されている人物²⁷や、終戦直後にフランス解放の象徴的存在になったミヨー (田崎 2013: 344-345) であった点も特徴である。ただしプログラムの最後は、馴染みのフランス音楽 (16日はラヴェル《ボレロ》、17日はルーセル《交響曲第3番》) で締めくくられた。こうしたコンセプトで上記二つの演奏会のプログラムを構成することは、西南ドイツ放送 (バーデン=バーデン) からの正式な要望であった。それは、近い将来にドイツとフランスの若手作曲家の有益な交流の確立を試みる、という方針が、ドイツの諸ラジオ局の責任者たちに課せられていたことによる。これに先立ちONは1951年冬に、オーストリア出身のロスバウト (ROSBAUD, Hans: 1895-1962) の指揮でフォルトナー (FORTNER, Wolfgang: 1907-1987) とヘンツェ (HENZE, Hans Werner:

【表】フランス「国営ラジオ局」が放送したフランス国立放送管弦楽団 (ON) 外国公演番組*(1945. 3. 1 ~ 1952. 4. 17)

番号	放送年月日	放送作品	チャンネル**	指揮者	備考
	6月18日	「戦争、勝利、平和の音楽」 (曲目詳細は不明)	不明		Orchestre et choeurs de ON &B.B.C.&Suisse
1	1946年 1月31日	《オペロン》序曲 (ウェーバー) 交響曲《ジュピター》(モーツァルト) ピアノ協奏曲 イ長調 (リスト) 交響詩《ファエトン》(サン＝サーンス)	20:45- 22:00 (N)	M.Rosenthal	リモージュでの演奏会
2	5月12日	交響曲第35番「ハフナー」(モーツァルト) ピアノ協奏曲 (J. アプシル) 弦楽交響曲第3番 (J.リヴィエ) 《ダフニスとクロエ》(ラヴェル)	20:00 - 22:00 (N)		ブリュッセル ボ ザール宮殿公開演 奏会 (交換演奏会)
3	1947年 6月30日	《ベンヴェヌート・チェッリーニ》序曲 (ベルリオーズ) 交響曲 (フランク) ピアノ協奏曲第4番 (ベートーヴェン) 《ロメオとジュリエット》(ベルリオーズ) 《ティル・オイレンシュピーゲル》(R.シュトラウス)	20:30 - 22:00 (Parisien)	M.Rosenthal	ロンドンでの演奏会
4	7月3日	《真夏の夜の夢》(H.パーセル) 協奏曲第2番ト長調 (チャイコフスキー) セレナーデニ長調 (モーツァルト) 交響曲第7番 (ベートーヴェン)	21:05 - 22:45 (N)	O.Klemperer	ロンドンでの演奏会
5	8月7日	《ローマの謝肉祭》序曲 (ベルリオーズ) 交響曲 (ビゼー) 《優雅で感傷的なワルツ》(ラヴェル) 《左手のためのピアノ協奏曲》(ラヴェル) 《ダフニスとクロエ》第二組曲 (ラヴェル)	20:50 - 22:30 (N)	M.Rosenthal	ジュネーヴでの演奏会
	8月11日	交響曲第1番 (ブラームス) 《牧神の午後への前奏曲》(ドビュッシー) 《火の鳥》(ストラヴィンスキー)	20:30 - 22:00 (Parisien)	P.Kletzki	ラ・ショー＝ド＝ フォン (スイス) での演奏会 / 録音 中継
6	8月14日	《徳高き女》組曲 (H.パーセル) 《ポーツマス・ポイント》序曲 W.ウォルトン) 《シャイロック》(フォーレ) 《パッカスとアリアーナ》第3組曲 (ルーセル) 弦楽交響曲第3番 (J.リヴィエ) 《ダフニスとクロエ》抜粋 (ラヴェル)	20:50 - 22:30 (N)	M.Rosenthal	ロンドンでの演奏会 / 録音中継
7	1948年 6月24日	「ストラヴィンスキー音楽祭」 《鶯の歌》 《三楽章の交響曲》*ドイツ初演 《オルフェ》*初演	(N)	Roger- Desormière	バーデン＝バーデ ンでの演奏会 (の 可能性が高い)
	1950年 8月20日	組曲《アルルの女》(ビゼー) ピアノとオーケストラのための《バラード》(フォーレ) 組曲 へ長調 (ルーセル) ピアノ協奏曲 (ラヴェル) 《ラ・ヴァルス》(ラヴェル)	(N)	Roger- Desormière	エジンバラ音楽祭
	8月21日	《ブランデンブルク協奏曲》第5番 (J.S.バッハ) オルガン協奏曲 (J.S.バッハ) 交響曲第5番 (ショスタコーヴィッチ)	(N)	L.Berstein	エジンバラ音楽祭
	8月22日	《トレドの二人の盲人聾者》序曲 (メユール) 《ゼミールとアゾール》バレエ組曲 (グレットリー) 交響曲 (ラロ) 《シンフォニエッタ》(プーランク) 《王は楽しむ》バレエ組曲 (ドリープ)	(N)	T.Beecham	エジンバラ音楽祭
8	1951年 9月21日	《レオノーレ》序曲第3番 (ベートーヴェン) 《協奏交響曲》(モーツァルト) 交響曲第5番 (J.リヴィエ) 《ダフニスとクロエ》(ラヴェル)	(N)	E.Bour	ベルリンでの演奏会
9	1952年 4月17日	《担がれた術学者》序曲 (P.キャブドヴィエル) ヴィオラ協奏曲 (J.リヴィエ) 交響曲第3番 (ルーセル) 《供養の石柱Cippus Feralis》(F.シュミット) 《ヴェネチアの舞踏会》(C.デルヴァンクール)	(N)	J.Martinon	フランクフルト (ドイツ)での演奏会

*Collection *Radio 44-54*. hebdomadaires des programmes de la Radiodiffusion Française.の調査に基づく。

** (N)はナショナル・チャンネルを示す。

表左の「番号」は、本文中の表番号に対応する (例:番号1⇒【表】1)。本文中で言及している注目すべき演奏会および作品については太字で示している。

1926-2012) という二人の若手ドイツ人作曲家の作品を上演している。一方ケルン(4月18日)とシュトゥットガルト(4月20日)の音楽ホール公開演奏会では、ベルリオーズ、ドビュッシー、ルーセル、ラヴェルの有名な作品、すなわち「フランス音楽の遺産」が演目の中心であった。そして現代ドイツ音楽へのオマージュとして、ヒンデミットの《画家マチス》を含んでいた。

こうしたON演奏会は、現地のドイツ人聴衆にどのように受け止められたのか。最初の2都市での演奏会では、聴衆はミヨーとバレース、ついでジョリヴェとキャブドゥヴィエルの作品を高く評価したものの、他の作曲家にはあまり注目しなかったことが報告されている。散漫でなく、より重要で、内容の充実した作品を選択できたのではないかと、またドイツ人聴衆の嗜好と傾向を鑑みて少し先進的すぎた、という批判がなされている²⁸。フランクフルトの地元新聞でも「フランクフルトのドイツ人聴衆は、正直言って、演目に特に楽しんだという様子ではなかった。偉大なフランス音楽、とりわけドビュッシーとラヴェルがそこにはなかったのだ。」と書いている²⁹。それに対して、有名なフランス音楽とヒンデミットの作品で曲目構成された後半の2都市では、ONは聴衆の大喝采を浴びたことが報告された³⁰。しかし「国营ラジオ局」がフランスで放送したのは、このうち17日フランクフルトのスタジオ公開演奏会だけであった(【表】9)。「国营ラジオ局」は新たな仏独音楽交流を自国の現代音楽で行ったことを印象付けたかったことが推測される。

5. 結語

以上より、フランス文化の発信に強い意欲をみせた初期「国营ラジオ局」音楽分野での国際文化交流戦略を考えた時、「フランス現代音楽の上演」が相手国への文化進出の鍵であったことが浮かび上がる。文化遺産としてのレパートリー上演と並行してフランスの「現在」の活力を主張することは、自国の文化的優位性を対外的に主張する最も強い姿勢だったのではないだろうか。このことは、まず相手国との政治的・文化的関係により交流に用いられた音楽領域に違いがみられることからうかがえる。政治的大国アメリカへのON演奏旅行(1948年)では確実な成功の実績を優先して定番フランス音楽による演奏プログラムを構成したが、新たな政治的関係構築を模索し始めていた西ドイツへのON演奏旅行(1952年)ではあえてフランス現代音楽中心のプログラムを準備し、現代音楽推進の実験を行っている。また多くの場合自国の現代音楽上演と引き換えに相手国の現代音楽上演が取り決められていた。

音楽での国際文化交流は独立した対外政策ではなく、実は国内向けの文化政策と深く結びついている可能性も指摘できる。特にON外国公演は、国際交流の場で評価された、という「実績作り」の点で重要な意義を担ったと考えられる。音楽部門監督パローの提唱した方針、すなわち、聴衆のドイツ・ロマン派音楽偏向からの脱却およびフランス現代音楽によるフランス人としてのアイデンティティ高揚、は、フランス現代音楽を推進するONの外国公演成功により正当化されるのである。ON西ドイツ公演時ではドイツ人聴衆にあまり人気のなかったフランス現代音楽プログラムがフランス国内で放送された点も興味深い。

本研究では「国营ラジオ局」の芸術音楽政策について、外国との放送番組交換およびラジオ放送楽団の外国公演時の演奏曲目の視点から検証と考察を行った。今後は促進されたフランス現代音楽の様式的傾向や作曲家の活動傾向についてもさらに調査を進めていきたい。

*JSPS 科研費 21720047、住友生命第2回「女性研究者への支援」(平成21-22年度) 助成。

註

1: 次の文献を参照: 田崎2011; 田崎2013。

2: 1954年以降、ラジオに替わるテレビの発達計画が開始する上(ECK 1997: 6)、周辺ラジオ局(Radio Luxembourg, Télé-Sarre, Europe no.1)がフランス全土で放送可能になり、ラジオ局間の競争の激化が始まる(ECK 1997: 6)。

3: 音楽部門監督のパローはすでに1945年7月の公式記者会見にて、毎月定期的に外国人指揮者招聘してきた実績を強調している[“France: Une année d’activité musicale à la Radio française.” *L’Union Internationale de Radiodiffusion*, 236号(1945年9月), 293-295.] (AN: F43/162)。その後も総局長ポルシェはONが外国の一流の指揮者たちとの共演を取り付けていることを定期的に報告している。

- 4 : PIERLET, Jean, "La quinzaine radiophonique: la Radiodiffusion Française en présence des stations émettrices étrangères.", *Radio Nacional* [sic.] (1947年1月24日).
- 5 : "Projet de Réorganisation des divers services étrangers et France d'Outre Mer", (1947年3月25日). (AN: 19870714/18)
- 6 : 1947年7月3日記者会見原稿. (AN: 19870714/14)
- 7 : 「国営ラジオ局」制作録音を受領した国の数は、1946年の25ヵ国に対して1948年には48ヵ国に、外国ラジオでの放送時間は1946年の995時間に対して1948年には4968時間に増えている。{BOUGRAIN (Député de Saône-et Loire, ASSEMBLEE NATIONALE) 宛手紙, s.d. 1949年8月23日付手紙に会する返信} (AN: 19870714/18). 1950年には「国営ラジオ局」は外国番組の中継放送を920時間行ったのに対して、諸外国はフランス番組を計1,110時間中継放送した。("Programmes: France", *Bulletin de documentation et d'information*, Union Européenne de Radiodiffusion, vol. III, no.12 (1952年3月15日), p.179.)
- 8 : O.J.DUCHATEAU, "Service des relations avec les radios étrangères" (推定1946年3月). (AN: 19870714/18)
- 9 : チェコスロヴァキア (1947年10月7日)、ネーデルラント・ラジオ局 (1948年1月1日)、ポーランド (1948年3月5日) に確認できる (AN: 19870714/18)。
- 10 : O.J.DUCHATEAU (前出)。
- 11 : "Aperçus des liaisons, relais et échanges artistiques effectués avec les Radiodiffusion Etrangères" (AN: 19950218/22)
- 12 : *ibid.*
- 13 : "Compte rendu d'exploitation des échanges internationaux pour le mois de janvier 1948". (AN: 19870714/18)
- 14 : "Aperçus des liaisons~" (AN: 19950218/22) (前出)。
- 15 : アメリカのラジオ音楽番組では、芸術音楽が軽音楽にとって代われ、芸術音楽番組自体も入門的番組や演奏会の中継放送の割合が増えている傾向が指摘されている。(GANTELME, J. "La Radiodiffusion et l'art musical (1)", *L'Organisation Internationale de Radiodiffusion*, no.18 (1948年7月), 306). (AN: F43 166)
- 16 : アメリカから送られた10数個のオペラ完全上演録音は1945年4月17日からナショナル・チャンネルで月に一回放送された。{"Aperçus~" (AN: 19950218/22) (前出) }
- 17 : Collection *Radio 44-54*. hebdomadaires des programmes de la Radiodiffusion Française. の調査に基づく。
- 18 : 多くの場合、旅費はフランス側が負担し公演受入国は出演料と滞在費を負担することで費用折半している。1950年9月12日に「国営ラジオ局」を管轄する情報省が旅費を自分の部門から捻出することはできないと回答した時には、外務省が旅費を出すことを決めている。{Le Ministre des Affaires étrangères à Monsieur le Directeur Général de la Radiodiffusion Française, "Concert à Luxembourg par l'Orchestre National de la Radiodiffusion Française".(AN: F/41/2254)}
- 19 : DOUAY 1994の記述では、ON最初の外国公演は「ベルリン (連合軍フェスティバルにて)」とある (p.67)。しかし現段階の筆者の調査では、この公演情報の詳細は確認できていない。
- 20 : ROSTAND, Claude, "L'Orchestre national à Bruxelles", *Radio 46*, no.81 (1946年5月10日) .
- 21 : 1947年10月24日記者会見原稿. (AN: 19870714/14)
- 22 : ON北アメリカ演奏旅行時の詳細については、次を参照: DOUAY 1994: 67-70; BARRAUD 2010: 499-565.
- 23 : MINOUX, Marcel, 1948, "Création d'un Centre Musical Français à New-York", *Musique et Radio: revue technique et professionnelle de musique*, no.445 (6月), 191.
- 24 : 1948年10月に、仏独文化交流を回復する公式の態度として、パリの国立近代美術館 Musée national d'art moderne (1947年設立) とドイツ・カールスルーエ州立美術館の間で相互寄贈が実現した。これによりドイツ・フランス占領域内の人民教育部 (D.E.P.) は、約80点のフランス人アーティストによる現代版画やリトグラフをカールスルーエ州立美術館に寄贈する。この中にはブラック、マティス、ピカソの版画が含まれた。その交換にパリ国立近代美術館はドイツ人アーティスト、ヴィリー・バウマイスター (Willi Baumeister: 1889-1995) の絵画《幸福の時 Jour heureux》(1947) を受け取っている (SALM-SALM 2003: 142) 。
- 25 : 音楽部門監督パローはストラヴィンスキー音楽祭シリーズを開始した理由について、ストラヴィンスキーの音楽はその様式における多様性から、占領下にドイツ当局が支配したラジオ局「ラジオ・パリ」が定期的な放送で促進したドイツ音楽の優位性を印象付ける数々の演奏会の記憶を一気に拭き去るであろうと確信していたことを挙げている (SPROUT 2013: 151-152)。
- 26 : RUNDSCHAU, Bonner, "L'Orchestre radio de Paris: malheureusement seulement de passage: Visite et causerie dans la Maison de Beethoven. Salutations officielles." *Revue de Bonn* (1952年4月21日). (SAeM: no.33)
- 27 : E.Barraine, P.Capdevielle, C.Delvincourt, A.Jolivetが相当する。
- 28 : LE GUILLARD, Albert, 1952, "L'Orchestre National en Allemagne", *Radio: Information-Documentation*, no. 6 (6月), 11.
- 29 : s.n. "Journal 'Universel' de Francfort: Paris joue à Francfort" *Frankfurter Allgemeine Zeitung* (1952年4月19日). (SAeM: no.33) なお同じ記事の中で「若手と中堅の作曲家の中では、ミヨー、プーランク、フランセ、もしくはあの「メシアン」が歓迎された。」という記載もある。
- 30 : LE GUILLARD 1952 (前出)。

引用史料・文献（雑誌・新聞記事をのぞく）・研究文献

- フランス国立公文書館 Archives nationales (A.N.) : 19870714/14; 19870714/18; 19950218/22; 20020001/61; F41/ 2254 ; F43/162; F43/138.
- ラジオ・フランス Radio France: Service Archives écrites et Musée (SAÉM): : Fonds / no.33, 210
- ALTEN, Michèle, 2000, *Musiciens français dans la guerre froide (1945-1956): L'indépendance artistique face au politique*, Paris: L'Harmattan.
- BARRAUD, Henry, 2010, *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique*, CHIMÈNES, Myriam; LE BAIL, Karine (éds.), Paris: Fayard/ Bibliothèque nationale de France.
- CLANCIER, Eliane, 2002, *Le Club d'Essai de la Radiodiffusion française (1946-1960)*, Université de Paris I Panthéon-Sorbonne (mémoire).
- DOUAY, Claudette, 1994, "Soixante ans d'histoire", *L'Orchestre national de France: l'album anniversaire 1934-1994*, CANTAGREL, Gilles (dir.), Paris: Radio France - Van de Velde, 19-95.
- ECK, Hélène, 1997, *La radiodiffusion sous la Quatrième République: monopole et service public, août 1944-décembre 1953*, Thèse, Université de Paris X II.
- ECK, Hélène, 2010, "Radio", *Dictionnaire d'histoire culturelle de la France contemporaine*, DELPORTE, Christian; MOLLIER, Jean-Yves, SIRINELLI, Jean-François (dirs.), Paris: Presses Universitaires de France, 686-691.
- FRANKE, Bastian, 2011, *Les relations sociales et politiques entre la France et l'Allemagne depuis 1945*, München: Grin Verlag.
- JULIEN, Élise, 1999, *Les rapports franco-allemands à Berlin 1945-1961*, Paris: L'Harmattan.
- LE BAIL, Karine, 2005, *Musique, pouvoir, responsabilité: la politique musicale de la Radiodiffusion Française, 1939-1953*, Thèse, l'Institut d'études politiques de Paris (histoire).
- MÉADEL, Cécile, 1999, "1954-1962: Quels programmes pour la radio?", *Radio et télévision au temps des «événements d'Algérie» 1954-1962*, BUSSIERRE, Michèle de; MÉDEL, Cécile; ULMANN-MAURIAT, Caroline (dirs.), Paris: L'Harmattan, 149-162.
- PORCILE, François 2001, *Les conflits de la musique française 1940-1965*, Paris: Fayard.
- PROT, Robert, 2006, *Jean Tardieu et la nouvelle radio*, Paris: L'Harmattan.
- SALM-SALM, Marie-Amélie zu, 2003, *Échanges artistiques franco-allemands et renaissance de la peinture abstraite dans les pays germaniques après 1945*, Paris: L'Harmattan.
- SPROUT, Leslie A. 2013, *The musical legacy of wartime France*, Berkeley: University of California Press.
- 田崎直美, 2011 「フランスの戦後復興期における芸術音楽の役割: フランス・ラジオ局 (Radiodiffusion Française (1945-49年)) の音楽政策の検証より」『人文科学研究』第7号, 99-111.
- 田崎直美, 2013 「フランス第四共和政前期 (1946-54年) 国営ラジオ局における音楽政策と戦争の記憶—フランス国立管弦楽団初演作品とその評価の考察より—」『人間文化創成科学論叢』第15巻, 339-347.
- VINCENT, Marie-Bénédicte 2008, "Punir et rééduquer: le processus de dénazification (1945-1949)", *La dénazification*, Paris: Perrin, 9-88.